

令和5年度 自己評価(結果)

学校番号	62208	学校法人脳谷学園 静岡南幼稚園	記載者	青島範明
------	-------	-----------------	-----	------

学校教育目標	遊びを通して様々なことを学び、互いの考えを尊重しながら、自己を確立する。	【総合評価】 自己点検評価において、どの評価項目も4以上の評価結果が出たことは、一人ひとりの教職員が、自信をもってそれぞれの業務遂行にあたった結果、その成果が課題を残したとしても、一定基準をクリアすることができたものとして評価したい。重点目標においては、収容定員の獲得については、少子化が進む中目標値を超える入園児を得られたことは、本園の教育活動が評価されたものと考えられる。また、時代を見据えた教育に関しては、従来展開してきた非認知能力の育成から一歩踏み込み「主体的・対話的で深い学び」の根幹となる理論を理解し、「振り返り」と「対話」の重要性を知ること、個々の教員が展開する教育活動を工夫していくベースができたことは大きな成果であった。さらに、中長期的な本園のあるべき姿についても、理事会・評議展開という経営母体だけが考えるのではなく、教職員にそうした意識が芽生え始めている点は、組織力を強める点で大きく評価できるものとしよう。 各領域においては、まずは園児の安全を優先するという環境づくりをし、研修を通じ危機管理に対する教職員の意識の高まり、未就園児に対する広報活動の充実、発達障害児に対して病院・療育施設・保護者との連携をとる体制づくり、将来的なDXを進めていくうえでの準備等、いずれの領域に関しても、自信を持った評価ができたことは、教職員の熱意と頑張りのおかげと評価したい。	
教育方針	・学校教育法及び幼稚園教育要領に従い、幼児教育の役割を遂行する。 ・家庭では体験できない新たな世界と出合いの場を設け、幼児の自立に向けた基礎を育成することをねらいとした教育を目指す。		
今年度の重点目標	評価	今年度の成果と課題	次年度の取組
1 少子化がさらに進行する中、目標園児数(収容定員)を獲得する。	4	・商業施設や地域イベントへの参加、園のイベント実施はPRに有効であることがわかった。 ・デジタルサイネージなどの活動を通じて、未就園児の取り込みや園の魅力発信に努めた。 ・教育内容の提供が重要であると考える。	幼児教育上では、子ども達の総合的な成長を促進することを重視し、保護者にその姿や成長を明確に伝える努力をしていく。さらに、外部に発信できる新しい取り組みを導入し、地域の人も参加できるイベントや行事を開催し、地域とのつながりを強化する。また、園児募集に際しては、小学校や中学校の紹介も行い、情報提供を入園前から行っていく。
2 時代を見据えた教育を展開する。	4	・非認知能力や主体性、対話的学びなどに重点を置き、幼児教育の共通意識を共有し、互いに高め合ってきた。 ・様々な特性や国籍を持つ子ども達と共に生活を営むことができる環境を整えた。 ・従来の年間計画に沿った保護者の期待や満足感を満たすだけでなく、新たな取り組みを導入することができた。 ・現代の職の求めるものとして、様々な経験を提供したいとの意識があり、フットボールやリズムあそびなどの外部指導を通じて、子どもたちに人間関係の広がりや新たな経験を提供してきた。	・子どもの主体性を尊重し、環境やカリキュラムを見直し、教材アプリケーションを導入する。 ・インクルーシブ教育を目指し特別支援を必要とする幼児の環境や療育を整え、多様な子どもたちを柔軟に受け入れる準備を進める。 ・他園の事例や研修を通じて遊び中心の教育の重要性を理解し、子どもの成長をクラスで確認し、資力能力の育成に意識を向ける。 ・デジタル化が進む中、本園の特色として教育のデジタル化を進め、園児の獲得に注力すると共にDXを図り、業務効率を高める。
3 5年度・10年後を見据えた本園の姿について検討する。	4	・私立小学校や中学校との交流を入園前から促し、教員の研修や教材適所を重視することができた。 ・短期大学や大学、専門学校との連携を強化し、実習生の受け入れを積極的に進めた。 ・変化する時代や事柄に柔軟に対応し、園での行事や活動を適時変化させる考えを持つことができた。	・私立小学校や中学校との交流を入園前から促し、教員の研修や教材適所を重視する。 ・短期大学や大学、専門学校との連携を強化し、実習生の受け入れを積極的に進める。 ・人員不足への対応として、職員の確保も行政を利用したサポート職員の活用を検討する。 ・変化する時代や事柄に柔軟に対応し、園での行事や活動を適時変化させる考えを持つ。

領域	ねらい	評価項目	今年度の達成目標	昨年度の実績	評価	今年度の成果と課題	次年度の取組
学校経営 教育課程・指導方法	適切な教育課程が編成され、学習目標・計画が明示され、日常の学習活動を効果的に展開する。	教育課程、教育目標・計画・指導、課題実	・今後も継続して、教師のみならず、園児たちも振り返りを行うことで、深い学びにつながる教育活動を展開していく。 ・教師は、日々の教育活動において、新しい発想や、アイデアを出し合いマンネリ化せず、年々向上出来るようにする。 ・学年に応じて行われる外部講師による「リズムあそび」、「あそびっこ」、「フットボール」、「スイミング」や、内部のALTによる「えいごあそび」を、それぞれが単発的な活動に終わるのではなく、それぞれの活動が、年齢の発達段階において連関性をもたせ、諸活動を通して、子供たちの「非認知能力」を高めることが、本園の一層の強みとなるよう、教育活動をしていく。また、思考力を引き出す活動も展開する。そして、その様子をもっと保護者や、未就園児の保護者にもアピールする。	・今年度も新型コロナウイルス感染対策をしながら状況を見て、できる限り行事及び活動等を実施した。 ・子どもたちの個性を認めながら、誰もが活躍できる教育活動を展開した。そのプロセスの中で、教師自身も常に実施したことを振り返り、一つの活動が単発的なもので終わらせるので話、次の活動につなげる事を意識した活動を展開した。 ・学年に応じて行われる外部講師による「リズムあそび」、「あそびっこ」、「フットボール」、「スイミング」や、内部のALTによる「えいごあそび」を展開し、活動を通して、子どもたちの「非認知能力」を高めるとともに、本園の強みとなる教育活動として強く外部にアピールしてきた。その様子をもっと保護者や、未就園児の保護者にもアピールしたい。	4	・振り返りの重要性を認識し、次への分野に進むかや偏りのない学びを追求できた。 ・新規採用について自己の仕事に責任を持ち、学んだことを実践に活かす取り組みを行うことができた。 ・毎日の振り返りを通じて言語獲得や意欲、思考力、聞く力などの成果を得られた。 ・外部講師による活動を積極的に取り入れつつ、日々の活動を積み重ねて充実した学びを提供することができた。 ・行事に向けた活動を見直し、ねらいに沿った計画を立てることで達成感を味わいつつ、継続的な学びを促進した。	・子どもの主体性を尊重し、興味関心を引き出し、環境整備とカリキュラムの見直しを行う。 ・振り返りを通じて、五領域の均衡ある学びを追求する。 ・個々の得意分野を活かし、教え合いとスキルアップを促進する。 ・一人担任の場合、大幅に遅れた発達に限界を感じつつ、若手教師のスキルアップを目指し、新たな試みを積極的に導入する。
安全管理	日常から防災に対する意識を高め、予期せぬ災害時に適切な対応ができる体制作りをすることが必要。また、学校としても校内の危険箇所の定期的な点検、園バスの安全運行といった意識を常に持ち合わせる。園児の健康管理のための検診計画を作成・実行し、疾病者に対する治療助言を行う。	防災訓練(校内・校外)、災害時の対応、安全な教育環境、安全なスクールバスの運行、検診計画、健康管理指導	・防災訓練(校内・校外)、災害時の対応、安全な教育環境、安全なスクールバスの運行、検診計画、健康管理指導 ・園バスの乗降は、教職員及び園バスの乗務員で、再度改定された危機管理マニュアルをもう一度確認し、事故が起きないような体制を作る。 ・最近是不審者の情報も聞かれるので対応についても、教職員の連携を考えていく。外部からの来訪者には、正門ではインターホンを必ず押してもらい、顔を確認してから入ってもらうようにすることの徹底を図る。また、不審者対策についての訓練実施も実施する。	・年間を通じての防災に係る訓練を実施し、有事の際に、子どもたちも適切な行動がとれる訓練を実施した。 ・教職員は防犯に対する意識がまだまだ高まっていないと思われる。外部から入手した事件情報に関して、園メールの配信などを通して、保護者と共有するよう努めた。最近是不審者の情報も聞かれるので対応についても、教職員の連携を考えていきたい。来訪者には、正門ではインターホンを必ず押してもらい、顔を確認してから入ってもらうようにすることの徹底を図る。また、不審者対策についての訓練実施も実施した。 ・園児たちの登降園児の安全確保のため、交通ルールを学ぶ安全教室を年間で計画し実施した。 ・遠足及び園外保育など、外部での教育活動を実施する際は、目的地までの安全な移動方法及び現地での安全な活動実施が可能となるよう、該当学年による事前の下見と教職員間の情報共有を図った。 ・園バスの運転に際し、事故の発生がないように、運転手に対する指導、さらには添乗する教職員に対する指導を行った。しかし、園バスの運転に対する外部からのクレームのあったので全体での意識改善が必要である。	4	バス運行は事故なく遂行され、教員同士で統一認識を持って運行できたことが良かった。 ・保育中にインターホンを鳴らさずに迎える保護者があり、不審者と誤解される可能性があるため、必ず押してもらおうとする。また、療育施設の方が迎えに来る場合は、名札を見せるなど識別できる手段を用いるべき。 ・不審者対策のグッズや使い方について職員で練習を行う。 ・バス名簿の記入漏れが多く、コミュニケーションにより名簿への書き漏れが起きているため、注意が必要である。 ・病院の医師・看護師を招いて緊急時の対処法を実践を交えて研修し、専門知識を学ぶことができた。今後も定期的に行いたい。 ・不審者情報が入った場合に備え、不審者訓練を実施してほしい。 ・バスの運行状況を保護者がスマートフォンで確認できるように改善が必要である。 ・避難用滑り台はあるが、雨天時に利用できないという課題がある。	・コミュナビを活用し、預かり保育や連絡事項、園バスコースなどを含め、利便性を向上させる取り組みを行う。 ・専門家による遊具の安全点検を定期的に実施する。 ・不審者に対する非難訓練を実施し、防災用具の点検と使用方法を確認する。 ・預かり保育などの情報をメールで提供するシステムを導入し、担任や預かりの先生の負担を減らす。 ・防災訓練の頻度を増やし、教師や子どもたちが防災意識を高める。 ・園バスの運転や乗降に関する危機管理マニュアルを確認し、徹底する。問題が発生した場合は全体で共有し、再発防止に取り組む。 ・園外保育の時間を増やし、子どもたちが交通ルールを学び、危険に対する意識を高める取り組みを年少から満3まで段階的に行う。
子育て支援	年間を通じて、本園独自の子育て支援活動に積極的に取り組む。	年間を通じて、開園日の預かり保育及び長期休業中の預かり保育の実施、入園希望者に対する園の公開活動、未就園児を対象とした本園独自の活動の展開	・引き続き、年間200日を超える預かり保育の実施日を設定し、利用する保護者や子どもたちに対する利便性を高める。 ・1・2歳を対象とした未就園児の活動を色々な内容で計画し充実させていく。今年度実施したリンゴちゃんルームも、参加者同士が、本園地を中心として、運営方法や情報交換ができるように、運営方法を再検討し、実施していく。また、担当する人数も、年間を通じて動けるよう人員を配置する。 ・本年以上に園見学、体験を増やす。また、従前は違った形のものも検討し実施していく。 ・機会を作り、場所を変えての未就園児の活動イベントを検討する。 ・2歳児の一時預かりの実施が可能であるか検討する。 ・在園児と未就園児が交流できるイベントを企画する。	・年間200日を超える預かり保育の実施日を設置し、利用する保護者や子どもたちに対する利便性を高めた。 ・1・2歳を対象とした未就園児が参加できる「親子ふれあいあそび」や「りんごちゃんルーム」を、各月に実施した。これにより、幼稚園がどのようなところか、早期段階で保護者に理解してもらおうと、子どもたちが体験する場を設けることが出来た。引き続き、より保護者に対する魅力的な子育て支援を検討したい。 ・本園がどのような教育活動を展開し、どのような特色を持った幼稚園であるかを理解してもらおうと、園見学会や体験入園の実施回数を、昨年度以上に増やした。また、広報は引き続き園長・教頭だけでなく、教職員が全体で取り組む意識を持って組織づくりをすることができた。	4	アビタでの発表では、各学年が生きてきた活動を披露し、地域の方々に幼稚園を知ってもらう良い機会となった。 ・未就園児の活動を多岐にわたって計画し、園見学や体験を充実させた。 ・2歳児の一時預かりの実施を検討したい。 ・引き続き、未就園児の園庭開放などを通じて幼稚園に親しみをもち、子育て支援に繋がる取り組みを工夫する。 ・保護者との信頼関係を深め、相談しやすい園となるよう努める。 ・未就園児を対象とした活動が充実し、在園児との交流もあり、幼稚園の雰囲気を感じることができた。 ・年間200日以上の預かり保育を実施し、利用する保護者や子どもたちの利便性を高めた。 ・りんごちゃんルームなどで未就園児との活動を通じて、未就園児と在園児との関わりや交流を増やした。	未就園児の活動イベントを検討し、機会を設けて場所を変えることを考える。 ・「こども誰でも通園制度」の実施をふまえて、2歳児の一時預かりの実施可能性を検討する。 ・気軽に相談できる未就園児保護者が集まるサロンを継続し、イベントを企画する。また、入園後も子育てに悩む保護者がいることを考慮し、子育て相談を行えるような工夫を検討する。 ・園庭開放日を増やしているが、利用者が少ない。未就園児の家庭に園庭開放の情報を広め、園に足を運びやすい環境を整える。 ・園と保護者専用のアプリを導入し、日々の記録や成長、エピソードを共有できるようにする。これにより、バス利用の保護者などにも情報を伝えやすくなる。

特別支援教育	支援が必要な子、気になる子への対応をす共に、特別支援計画をたて実行する。	支援計画・支援体制の確立、巡回訪問カウンセリングの活用、療育施設との園児に関する情報交換、保護者との情報交換	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き巡回カウンセリングの講師やアリー、パソナやハッピーテラス、リタリコ、みなしあ等の療育施設や保健センター等と日常的に子どもの姿の情報交換を行い、保護者も含め三者間で協力し、発達障害を抱える子供の成長に寄与するように努めていく。 ・本園入園後に、子供の状況を見て支援が必要と思われる園児がいた場合は、保護者に子どもの状況を伝え、保護者に寄り添いながら、一緒に考えて対応を考えていく。 ・教師が在園児で、専門家の助言を必要とした場合は、療育関係を専門化する施設関係者や医師の助言を積極的に求めていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の子どもが発達障害ではないかと考える保護者が増加している、そうした保護者に対し、子どもの状況を細かく見ながら、家庭と情報交換を密にし、子どもの指導に活かすことで、成長を助けていく体制づくりをした。 ・入園後、指導の過程で気になる子供については、巡回カウンセリングを活用し、意見を聞くとともに指導助言を求めながら、日常の園児指導に活かした。 ・本園以外で、療育指導を必要とする子どもたちについては、通所するアリー、パソナやハッピーテラス、リタリコ等施設との情報交換を密にし、保護者も含めて、三者で子供の成長をサポートする体制を展開した。しかし、保護者に子供の状況が伝わらないケースも多かった。 ・発達障害時に関しては、その子にあった個別指導体制をとれるような環境を作り、場合によっては、園児と教師が一对一で指導する対応をした。 	4	<ul style="list-style-type: none"> 発達支援機関との連絡を密に取り、対応を協議した。 職員、保護者、支援機関との話し合いの場を設け実施した。 子どもにとってより良い保育環境やカリキュラムを学ぶため、療育施設などに見学へ行きノウハウを学んだ。 支援を要する幼児については、園全体として取り組み、学年毎のグループで取り組み、支援体制をさらに整える。 巡回カウンセリングの回数が増え、情報交換が密に取れていた。 保護者への子どもの問題についての伝え方が難しく、誤解を招きかねない場合には、巡回カウンセリングの講師や専門教師に助言を求めた。 済生会の小児科医師や療育施設との協力を通じて、保護者をスムーズに療育へと繋げる取り組みを行った。 保育中や預かり保育時間中に職員の共通意識を持ち、連携して対応する必要性を感じるが、人員が不足している。 	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援教育の理解を深め、担任一人が抱え込まないように、園全体として取り組み、学年毎のグループで支援体制を整える。また、園内での自発的な支援の開設にも取り組む。 預かり保育において、障害児などが利用することが多いため、専門的な指導ができる教師を配置することが望ましい。 支援が必要な子の情報をまとめ、療育施設や病院との連携をスムーズに進める。また、園内での支援的クラスを設け、少人数での指導を行う取り組みを進める。 職員不足に関しては、支援員の配置を検討する。
教育環境	園児たちが楽しんで教育活動に取り組める環境づくりに工夫をする。	「週案」及び「日案」における計画的な教育活動の実施、日常の教育活動の展開のうえで、興味・関心を高める工夫、活動の振り返りによる次の活動に対するモチベーションを高める	<ul style="list-style-type: none"> ・年度の教育目標、学年、学期でのシラバスを明確にし、それに基づいて「週案」「日案」で短期的な教育目標と到達目標を明確にする。また、それを、園長・教頭・主幹が目を通し、指導・助言をする体制を作る。 ・引き続き、非認知能力の育成に務める教育環境づくりをしていくことはいままでの延長で、諸活動を通じて、鋸歯も園児もリフレクション(振り返り)をすることを習慣化していくことで、「深い学び」につながる手法を考えていく。また、それにより認知能力の育成に、どこまで幼児教育段階で進めていくことができるかについて研究を深め、幼少連携プログラムについて考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「週案」及び「日案」で、短期的なスパンでの教育計画を作成する際に、子どもたちの興味・関心が高まり、個々の活動に対して楽しんで取り組めるようにした。 ・個々の教育活動において、子どもたちが自発的に考え、想像力を掻き立て、子どもたちの創造力を伸ばす教育環境の構築を図れた。 ・教師も子どもたちも、様々な教育活動の節目節目で、「リフレクション(振り返り)」をすることで、より深く学びについて考えていける教育スタイルを作り実行した。これを、PDCAサイクルで繰り返して、「深い学び」への手法を模索することができた。 ・各活動を単発的に終わらせることなく、継続的な活動にしていくことで、活動に発展性を持たせ「リフレクション(振り返り)」の機会を多く設定し、それにより活動に更なる発展性を持たせることができた。 	4	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの興味関心を理解した上で計画が立てられ、好奇心や探求心を掻き立て、非認知能力が培われた。 ・行事の保育ではなく、過程を大切に保育を実践し、保護者にも過程の重要性を理解してもらうように努めた。 ・様々な活動を進める際に、日々の発展を目指し、振り返りや次の日の見通しをクラスで話す場を設けた。 ・保育の連続性や子どもの興味・関心に合った保育を意識し、週案を作成し、振り返りを通じて改善点を明確にした。 ・子ども達の姿や様子から遊びや活動を展開し、各クラスや学年全体で遊びを広げる取り組みを行った。 ・活動の中や一日の終わりに子ども達との振り返りの時間を設け、写真や動画も活用した。 ・日々の保育の反省を書くことで一日を振り返り、今後の改善点を明確にすることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・若手のスキルを向上させるため、外部研修に参加した教職員が学んだことを共有し、全体でのスキルアップを図る機会を設ける。 ・発達障害の園児に対する専門的な知識の向上のため、定期的な教師間の情報共有や最新の情報や手立てを積極的に取り入れる。 ・支援が必要な子以外の子への配慮も重要視し、子ども達の気持ちを盛り上げる工夫をする。 ・教師自身も教育環境の向上のために教材研究や環境構成の見直しを行い、向上心を持ち続ける。 ・継続的な活動を行うことで子どもたちが興味を持ち楽しく活動できるような教育活動を実施する。 ・教師が進める教育活動ではなく、子どもが「やりたい」「楽しそう」と思えるような活動を行い、導入を丁寧に行う。
研修	教育内容が問われる時代、教職員の資質向上が常に求められるので、計画的かつ時代が求める教師となっていくための研修を的確に実施し、各教職員が個々のスキルを上げていく体制作りをする。また、研修内容を共有化していくためのシステム作りをしていく。	計画的な研修体制の確立、校外研修への参加、研修報告会の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・園内研修については、定期的にテーマを設定し、新たな知識・情報について触れる機会を設定する。 ・外部研修については、参加した教職員が学んだことを、教職員で共有できる機会を設け、全体でのスキルアップを図り、情報交換をしていく。 ・「はごろも教育研究奨励助成事業」において、外部講師を招いての研修体制を作ることができた。それを持って、「深い学び」に通じる手法について、実技指導を含めての研究活動ができるので、福井大学の小林和夫教授の手を借りながら、個々の教師のスキルアップを図る。 ・ECEQの公開保育に応募し、本園の教育について、客観的な見地から外部の教員に評価をしてもらうことができ、高い評価を得ることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・園内研修については、幼稚園協会でテーマとすることについての研修だけでなく、必要に応じてテーマを設定し、研修を実施することで、教員のスキルアップに努めることができた。 ・外部の研修に関しては、人員のやりくりを考えながら、教職員が参加できるような体制を整えることで、教員の処遇改善の適応条件を満たせるようにした。 ・外部研修については、参加した教職員が学んだことを、教職員で共有できる機会を設け、全体でのスキルアップを図ることができなかった点は、反省すべき点となった。 	4	<ul style="list-style-type: none"> ・研修を受けることで幼児教育における重要な考え方を再確認し、新たな視点を得るきっかけとなった。 ・毎日の園児との振り返りを通じて深い学びを促し、子供たちの意欲にもつながった。 ・園内研修は新たな知識の獲得だけでなく、教師間の情報交換の場でもあり、非常に有意義であった。 ・外部研修や研究奨励助成事業を通じて、教育の振り返りや対話の重要性を学び、自身の教育活動を見直すことができた。また、自発的に学びたい分野の研修に積極的に参加し、情報共有の場でもさまざまな教育関係者と出会い、学びを深めた。 ・園外の研修や交流を通じて様々なアイデアを取り入れ、今後もスキルアップを図り情報交換を継続していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度も福井大学の小林和夫教授の指導を受けながら、実技指導を含めた研究活動を通じて個々の教師のスキルアップを図る。 ・定期的な総合病棟の医師・看護師による救急医療の研修を行い、救急対応や緊急の病気の怪我が対処法を実践を交えて学ぶ。 ・変化を意識し、従来より方にとられず柔軟な対応を心がける。 ・個々の教師が得意分野を伸ばせるように研修参加を促し、必要に応じて資格取得の支援を行う。 ・外部研修については、簡単な朝礼ではなく、共有するための専用の時間を設ける。
保護者、地域住民との連携	保護者や地域諸団体や地域住民との交流・連携を図る。	保護者の会との情報交換、学校運営に対する外部団体の参画、外部要望の学校運営に対する反映、保護者に対する協力依頼	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、外部からもたらされるオファーに関しては、できる限り応えるべく対応をする。 ・保護者参観会等で、日常の子どもたちの様子を見てもらう機会を増やし、教師と保護者がコミュニケーションをとることで、情報交換ができるようにする。 ・私立関係者との交流の場ができる限り参加することで、情報交換に努め、今後の私立教育に何が求められ、どのように教育を展開すべきかのトレンドをつかむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルスの感染状況が沈静化の傾向がようやくみられるようになってきたが、今年度も地域との交流がとりにくい状況は続いた。しかし、少しでもかわりを持つことに關しては協力する意識をもって活動するよう努めた。 ・外部からもたらされるオファーに関しては、できる限り応えるべく対応をした。 	4	<ul style="list-style-type: none"> 外部からのオファーや地域のイベント実施には積極的に応じ、好評だったため、次年度も継続して実施する。 次年度では私立関係との交流参加を実施する。 保護者の会との情報交換や外部団体の参画、外部要望の反映など、職員間での情報共有が不十分であると感じる。今後はもっと情報共有を行う必要がある。 保護者には普段の様子や子供たちの成長に関する情報を伝え、12月には面談を行う。 参観会の実施を学年全体だけでなく各クラスでも行うようにし、学年だよりの作成では写真を豊富に使い、子供たちの様子や表情を伝えることに努める。 地域のイベントに積極的に参加し、地域の方との関わりを深める取り組みも行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 外部からのオファーには積極的に応じ、地域を巻き込んだイベントを継続して実施していく。 次年度は私立関係との交流参加を行う。 研修で学んだことをフィードバックし、日々の業務に柔軟性を持って取り入れることを重視している。業務内容の見直しや改善をする。 学校や他園と近い場所にあるため、学生などとの交流をはかり、共同で活動したり参加したりする機会を積極的に作る。
情報提供	幼稚園に関する活動状況などに関する情報発信を積極的に行う。	ホームページ、フェイスブック、インスタグラム等による情報発信、パンフレットの毎年更新、園メーやICTシステムの活用による保護者への情報提供と園との情報交換	<ul style="list-style-type: none"> ・新たにICTシステムを導入したことで、在園児の出欠管理については、定着してきた。次年度は、園バスの乗車・運航に関する連絡体制、預かり保育の申し込み及び決算方法について、保護者の利便性を考えた環境を実施する。 ・入園規模者にとってホームページによる情報収集は、保護者にとって基本的なものとなっている。更新については、順次新しい情報を提供できるように努める。また、在園児の保護者に対しては、情報共有がしやすいものとして活用する。 ・フェイスブックやインスタグラムで、タイムリーな園児の活動状況を公開する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者や社会で、本園の状況を知る入り口となっているホームページについては、全面的に刷新した。それにより、本園の教育内容が、より理解しやすい状態を作ることができた。さらに、様々なイベントに参加したいと思う方たちが、イベントに申し込みやすいシステムを構築することができ、参加者も昨年以上に増加した。 ・個人情報保護の観点から難しいものがあつたが、フェイスブックやインスタグラムなどで、本園の教育活動を公開し、子どもたちの躍動的な姿を公開することができ、本園の教育活動に対する理解が深まった。 ・新たにICTシステムを導入することで、在園児の出欠管理、園バスに関する情報、預かり保育の申し込みなどについて、保護者の利便性を考えた環境を作った。 	5	<ul style="list-style-type: none"> ・新たに導入したICTシステムにより、在園児の出欠管理や連絡事項の管理を効率化し、アンケート調査も実施した。 ・園バスや預かり保育に関する情報は保護者の利便性を考慮して提供し、利用しやすい環境を整えた。 ・お泊り保育やイベントなどの園児の活動状況をSNS(インスタグラムやホームページ)で公開し、保護者や関心のある方々にリアルタイムな情報を提供していった。 ・ホームページは入園希望者や在園児保護者にとって重要な情報源であると考え、情報提供の一環として活用している。 ・コミュナビの導入により、バスへの連絡が簡易かつ正確に行えるようになったが、アプリへの登録や入力の手間があるため、改善を検討している。 ・外部講師による活動や園の特色をパンフレットや園だよりで十分にアピールし、保護者や未就園児に情報を提供している。 ・園の特色や活動内容をより広く保護者や地域社会に伝えるため、展開中の活動や成長した子どもたちの姿を積極的に発信していくことが必要だと考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続きホームページやインスタグラム(ストーリー)などでタイムリーな情報を保護者に提供していく。 ・ICTシステムを導入して在園児の出欠管理が定着したが、次年度は園バスの乗車・運航に関する連絡体制や預かり保育の申し込み・決算方法についても保護者の利便性を考慮し改善する。 ・保護者が情報を受け取りやすいよう配慮し、職員も発信される情報を把握していく。 ・SNSは誰でも閲覧可能なため、注意して情報発信していく。 ・Instagramやホームページに子どもたちの園での様子を掲載し、保護者が園生活の様子を把握できるようにする。 ・バスの運行状況をスマホで確認できるようにし、保護者が到着時にはバス停で待つことができ、引き渡しをスムーズに行えるようにする。
総合評価					4		